

文学部新入生歓迎オリエンテーション・キャンプ

文学部

オリエンテーション・キャンプ

文学部学生厚生委員長 原野 昇

のパネルディスカッションは、先生や先輩の話聞くことにより、総科がどういうところかを考えるいい機会でした。三日間のいろいろな出来事、野外炊飯の班で作った夕食の味、キャンドルサービスでの厳かな気持ちを私は忘れることはないと思います。また、夜にテントの中で職員と時間を忘れて話をし、三日目の朝、寝不足の体でオリエンテーションに参加して、山道を息を切らして歩いたことも思い出の一つ

です。あいにくの雨のため、いくつかの企画が中止になったのは残念でしたが、そんな悪条件の中でキャンプを成功させてしまうところに総科のパワーを見えた気がしました。そして私自身、キャンプを終えて自分も総科生なのだと改めて実感しました。最後に先生、フェローさん、スタッフの皆さん素晴らしい三日間を有難うございました。

文学部主催としては第一回の新入生歓迎オリエンテーション・キャンプが去る四月二十四日(出)・二十五日(帰)の両日、高田郡吉田町にある広島県立吉田少年自然の家で行われた。参加者は新入生百六十九名(全入学者数百八十二名のうち)、上級生はフェロー十二名を含めて計二十八名、教職員は教官六名、職員二名の計八名で、総勢二百五名であった。

その他のプログラムは予定どおり順調に実行された。初日の夕食は飯ごう炊きで、各班対抗の料理コンテストの形式で行われ、優勝した班には文学部長賞ほかの賞品も出るとあって、各班ともさまざまな工夫をこらし、なかなか熱がはいっていたようである。審査は教職員によって行われ、各審査員が各班を回り、試食をしながら、あらかじめ決められた評価項目にしたがって採点していった。

二日目の午前中は、ひと月前に新築されたばかりの立派な町立体育館を借りきってゲームなどが行われ、午後には学部長による「イギリスおよびアメリ

リカの大学」と題する講演がスライドを用いて行われた。学部長自身の体験に基づく話であっただけに現実感があり、日本の大学との相違が、スライドの助けもあって、強烈に印象づけられた。このたびのオリエンテーション・キャンプは、文学部全十五専攻から最低一名は参加している「文学部新入生歓迎行事企画実行委員会」という学生のみによる委員会が、文学部学生厚生委員会と密接な連絡をとりながら、企画・立案から準備・実行にいたるまで、ほとんどすべてを行なった。学生諸君の綿密な計画と万端そつのない実行とを高く評価したい。

0からの出発

史学科三年 佐々木奈三枝



今後の課題は、いかにしてこのオリエンテーション・キャンプに文学部としての特徴を出していくかであろう。

0からの出発。どこまで進めたのかはわからない。実行委員会といっても、未熟者の集まりで、学部側にも、新入生側にも多くのご迷惑をおかけしたと思う。この場をかりて、オリキャンに関わったすべての人々にお礼をいって終わりとした。

本当に、ありがとうございました。